

市民病院だより

頭の健康を考える (第5回) 脳ドック

脳神経外科医師 田淵 和雄

今回は第5回「脳ドック」と題して脳の病気の予防策についてご紹介します。

Q: 脳ドックはいつごろ始まりどのような検査をするのですか。

A: 脳ドックは昭和63年頃から日本で始まり、今では全国に普及しています。日本脳ドック学会は、脳ドックが正しく進歩することを目的に「脳ドックのガイドライン」を作成し、高性能MRI（磁気共鳴断層撮影）検査、頸部血管超音波検査、心電図、血液検査、高次脳機能検査などを推奨しています。

Q: どんな人が検査の対象になりますか。

A: 通常、脳ドックの積極的な対象は中・高齢者で、脳卒中の

家族歴や、高血圧、糖尿病、肥満、喫煙などの危険因子を有する人たちです。脳ドックのMRI検査では20〜30分かけて脳内

部を撮影します。検査前に腕時計やネックレスなど金属性ものは危険なため、確実に体から外しておくことが極めて重要です。もし、心臓ペースメーカーや金属製の人工骨、ステントなどが体内にある場合は検査できません。

Q: 検査で見えされる異常にはどのようなものがありますか。

A: 何らかの異常があれば発見される可能性は高いですが、必ず見つかるわけではありません。見つかる頻度が高いのは脳卒中の危険因子である無症候性脳梗塞や、脳血管性痴呆の危険因子となる大脳白質病変、頻度は高くありませんが無症候性脳

出血や、無症候性頸部・脳主幹動脈狭窄、未破裂脳動脈瘤などが見つかることがあります。

Q: 無症候性脳梗塞や未破裂脳動脈瘤が発見される頻度と、そのときの対応について教えてください。

A: 65歳以上では、程度はさまざまであっても半数以上の方に無症候性脳梗塞が見つかります。重篤な脳卒中を引き起こす可能性のある無症候性脳梗塞の最大の要因は高血圧であるため、適切で十分な降圧療法などが必要となります。一方、未破裂脳動脈瘤が発見される頻度は、医療機関によって異なりますが、多くの場合1〜2%程度です。脳動脈瘤は、破裂すると重篤な膜下出血になり、治療を行っても命に関わることも多いため、ご本人・ご家族とよく相談したうえで、手術治療（開頭術または血管内手術）を検討します。しかし、年齢や、動脈瘤の部位・大きさ・形など考慮して個々に対応の仕方を判断する場合もあります。

Q: 検査の時間と費用について教えてください。

A: 行う検査の数によってまちまちですが、例えば、基本となるMRI（磁気共鳴断層撮影）とMRA（脳血管撮影）検査のみの簡易コースであれば、2時間以内に終わります。脳ドックは脳疾患の予防を目的とするものであり、健康保険の対象にはなりません。脳ドックの料金は施設によって、あるいは検査項目によって違いがありますが、4万〜8万円というところが一般的なようです。企業、健康保険組合、自治体によっては費用の一部を補助しているところもあるようですが、提示された額の全てを受診者が負担することになります。

小児科が拡充します

来年1月から、毎週木曜日の診療時間を19時まで（受付は18時30分まで）延長します。

時間外受診をされる方へ

急病などでの時間外受診の場合は、まず電話で宿日直医師の担当診療科を問い合わせ、来院してください。

【問合せ】小城市民病院 ☎ 73・2161 ホームページ・アドレス <http://www.city.ogi.lg.jp/hospital/>